

青少年の健全教育と薬物乱用防止を目的とした包括的なプログラムとして、世界44カ国、3,500万人の青少年がその恩恵を受けた「ライオンズ・クエスト・プログラム」。このプログラムが実際に日本の教育現場に導入されて1年が経った。友達、家族、地域、学校における日常生活において、他者と協調しながら、自分らしさを発揮していく力を身に付けることができるプログラムが、どのように評価を受けたかを探ってみる。

青少年教育の

新たな可能性

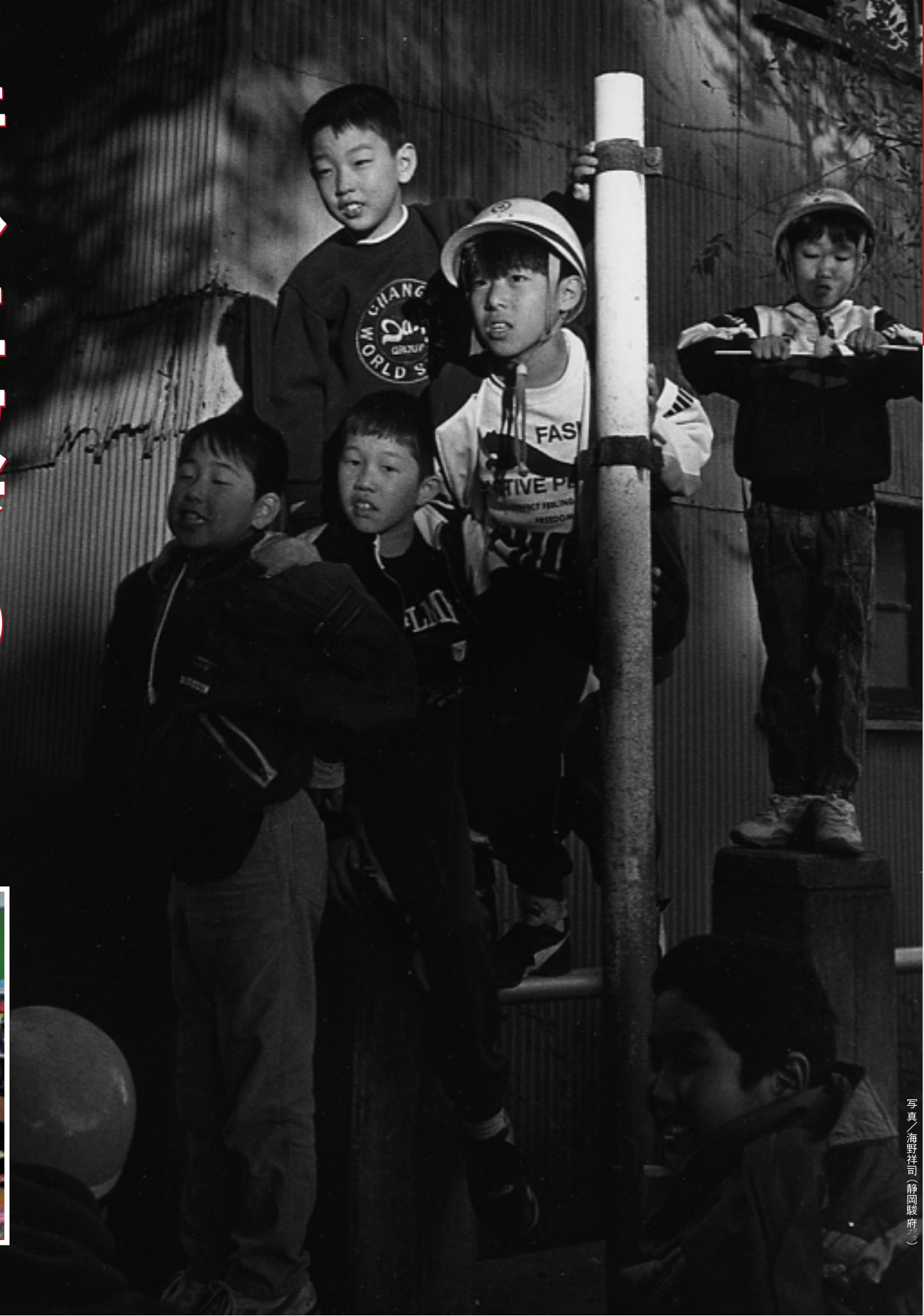
ライオンズ・クエスト・プログラム パイロット授業の一年

新しい可能性 ライオンズ・クエスト・プログラム

「今まで自分の意見を言うことが出来なかった子どもが、積極的に発言するようになった」。ライオンズ・クエスト・プログラムの活用によって、知識重視型の教育から、自ら課題を見つけ考えて意志決定出来る能力など、生きる力を育てる新しい教育方法が試されている。「ライオンズ・クエスト・プログラム」とは、青少年の生きる力を養うことを目的に、一九七五年にアメリカで設立さ

れたクエスト・インターナショナルが開発した教育プログラムである。「ライオンズ」の名が付くのは、同様に青少年問題に関して積極的に取り組んできたライオンズクラブ国際協会が、一九八四年からこのクエスト・インターナショナルと提携し、新しい教育プログラムの開発及びその普及活動に重要な役割を果たしてきたためである。

二〇〇〇年二月に、当時のジェームス・E・アービン国際会長が日本ライオンズを公式訪問した際、このライオンズ・クエスト・プログラムを日本の教育現場へ導入出来ないかと、政府関係者らと会談。これをきっかけに、同プログラムの日本導入への道が探られ、330複合地区がパイロット事業を始めることになった。もともとライオンズ・クエスト・プログラムは、小学生のための「成長期への対応 (Skills for Growing)」



写真/海野祥司(静岡県府)

中学生のための「思春期への対応 (Skills for Adolescence)」、高校生のための「飛躍への対応 (Skills for Action)」の二本の柱からなり、このうち日本への導入が進められたのが、プログラムの中心とも言える中学生のための「思春期への対応」である。具体的には「思春期のライフスキル(生きるための力)教育」と言っており、青少年(十〜十四歳)の健全育成と薬物乱用防止を目的とした包括的な内容となっている。家庭・学校・地域の人々が連携しながら、ライフスキル及び社会の一市民としてのスキルを青少年に指導するというのが主な目的である。

二〇〇一年一月に国際青少年育成財団(IYF)と合併したクエスト・インターナショナルを始め、ライオンズクラブ国際協会、パイロット地区の330複合地区、そして日本導入への資金を提供してくれたルーセント財団などの支援の下、プログラムの実行が準備されてきた。そして二〇〇一年四月に埼玉県川口市立芝東中学校がパイロット校に選ばれ、日本で初めてライオンズ・クエスト・プログラムを取り入れた授業を開始した。プログラム導入から一年経った芝東中の足跡をたどってみる。

川口市立芝東中学校 プログラムの導入まで

このライオンズ・クエスト「思春期のライフスキル教育」プログラムは、家庭、友達、学校、地域の中で日常生活を送る子どもたちが自分の意見を持ちつつ、周囲の人たちとうまく協力して、自分らしく行動する力を身に付けられるように構成されている。「ライフスキル」「ボランティア体験学習」「薬物防止学習」の三つを柱としており、このうち、コミュニケーションや感情対処、問題解決、目標設定といったスキルを身に付ける「ライフスキル」の学習が中心となる。

川口市立芝東中学校では各週の土曜日、新しく日本の教育現場に採用された「総合的な学習の時間」に年間十五時間の計画で、このライオンズ・クエスト「思春期のライフスキル教育」プログラムを取り入れることとなり、並木茂夫校長の指導の下、一年生五クラスで授業を開始した。

以前からライフスキル教育を研究していた神戸大学発達科学部の川畑徹朗助教授と共に、ライフスキルを

使った薬物乱用防止教育ビデオを制作していた並木校長に、ライオンズクラブがこのプログラムの話を持ちかけたことがそもそものきっかけであった。

当時は英語版のプログラムを日本語に翻訳しただけのものだったが、単純な翻訳では日本の学校教育にそぐわないため、教室で使える日本語に修正するのに苦労したという。さまざまな学校の教師がボランティアとして作業に取り組み、一年半ほどかけてプログラムの細部に修正を加えていった。が、それでもまだ実用的ではなかったため、実際に授業を行いながらそのつど修正を加えて日本語プログラムを完成させていくこととなった。



The Lion 2002. 6月号

コミュニケーションに 変化をもたらしたライフスキル

いないので、授業の前に先生たちは必ずIYFジャパンの職員らと打ち合わせし、リハーサルを行ってから

授業に臨んだ。授業が終わると反省会をして、次の授業への準備をするといったことを繰り返してきた。

ライフスキルを導入したクラスの教室には「学級の誇り」と題した一言が張り紙されている。これはクラス全員が最低限守るべきルールで、これに生徒たちは署名をする。署名することによって守る意識を高めようというのがねらいである。また、毎回の授業では、まず最初にその日の授業のテーマにあった名言名句「今日の言葉」を先生が紹介。最後には「振り返り」のワークシートで授業内容をおさらいする。目的意識を植え付け、更に繰り返すことによって学習効果が高まるよう工夫されている。そして何よりも目立つのが「生徒たちによる積極的な発言」である。

「普通の授業より面白い。普通の授業ならただ聞いていただけでいいという感じもあるけど、ライフスキルの場合、自分から発言をしなくてはならない。答えが一つじゃない。自

分が感じたことも正しいし、別の意見も正しい。みんなで一緒に考えるから、ほかの人の考えもちゃんと聞けるようになった」とは、ライフスキルの授業を受けている男子生徒の感想である。

ライフスキルの授業では、発言に関して間違っているものがないため、生徒たちはお互いに意見を言いやすい。そのため生徒同士のコミュニケーションが増え、クラスの雰囲気が増え、生徒それぞれの発表の仕方や聞き方がうまくなったという変化があった。無口で普段あまり目立たない生徒たちにも発言の機会が与えられるので、他の授業で見せないような積

極性も見られるようになったという。ほかにも「みんな考えていることが違うのに、これまでは自分の意見を通していたが、ライフスキルの授業がきっかけでみんなの意見にも耳を傾けるようになった」「一学期よりケンカが減った。たぶん相手のことを考えるようになったから」「クラスに馴染めなくて孤立してしま



人がいたが、ライフスキルの授業をきっかけに、お互い休み時間などに話し合う機会が増えた」などコミュニケーションに関する生徒からの感想が目立った。

授業に取り組む先生からは、「入学の直後から導入しているから、生徒同士知り合うというタイミング的にも良かった。また、指導の面でもブレインストーミング、グループ学習など新しい学習形態を体験出来て非常に勉強になっている」といったコメントがあった。

また、授業の中で行った、家族に手紙を書く活動に対しては、「(子どもが)そんな所を見ていてくれたのかと、うれしく思った」など家族から大きな反響があり、ライフスキルの授業を理解してもらおう良い機会となった。三学期には、これまで授業で学んだライフスキルを活用して、他者を援助し、学校や地域に対して積極的に貢献することを体験的に学ぶ「ボランティア体験学習」が生徒たちの参画によって行われた。

ライオンズ・クエスト・プログラムでは、こうした生徒の心の教育を推進する一方で、「ワークショップ」と呼ばれる研修制度で講師の養成にも力を注いでいる。ワークショップ

は、ライオンズ・クエスト・プログラムを実施する指導者が、授業を疑似体験し、ライフスキル教育への理解を深めるためのものである。二〇〇一年には、教育委員会、小・中学校関係者及びライオンズクラブなど、子どもの成長にかかわる人々を対象に七月二十七日二十八日、八月二十三〜二十四日と、それぞれ二日間、わたってワークショップが行われた。生徒が授業中にどのような対

応をするか自分自身の体で体験するのがワークショップ。そのためライフスキル教育を行う上で最も重要なファクターである。これらを体得するの二日間とは日程的に非常に短いように思われるが、参加者からは「すぐに授業に活用出来るのでとても参考になった」「他の職業、違う年代の人と一緒に何かをするという体験が出来、新鮮な発見があった」などの感想が寄せられている。

ライフスキルの一年を振り返って

芝東中学校の並木校長はライフスキルの一年間をこう振り返った。

「このような学習は、教師の力量がそのまま反映される。いわゆる昔の教え込み型の教師だと、子どもの気持ちを引き出すことが出来ずに、授業があつという間に終わってしまふ。結果的に教師の研修に大いに役立ったのではないか。また、日ごろ目立たない子どもも人前で話す機会を与えられるので、この授業を楽しみにしているようだ。中には、小学校四〜六年の間ずっとしゃべらなかつた子どもが（私の宝物を紹介する）

と云って話し出した事例もある。現在、一年生が落ち着いているのはこの学習の成果であると思う」

また、芝東中と同時期にライフスキルの授業を導入した私立東京家政学院中学でも次のように話している。「一年生四クラスに一学期で七回の授業を実施した。小学校の時に目立たなかつた子どもも参加出来、話し合いや物の貸し借りを通して、友人同士のやり取りが発展したようだ。授業によっては内容が盛りだくさんで、二〜三時間かかってしまったものもある。授業の終わりに振り返り

を行ったのが効果的だった。こうした学習を進めるにあたって、子どもたちに活動させる時、教師はすぐに正解を求めるのではなく、子どもたち自身が考え、答えを見つけ出す時間を待つ（我慢）が求められると実感した。もしかしたら、こうした進行上のやり取りこそがライフスキルを育むのではないだろうか。教員にライフスキルが身に付いていないと授業を進めることが出来ないだろう」

二つの学校からのコメントで共通するのは、「生徒のコミュニケーションがよい方向に発展した」とことと、「教師のためのトレーニングが大切」ということである。特に、一方的に教え込まなければならぬという思考を持った教師には、トレーニングを通じて発想に転換する機会がないと、プログラムの導入は難しいだろう。また、芝東中学校の並木校長は、日本の学校が完成したプログラムを

受け入れることに慣れていないという点を指摘した。単元は決められているが、授業の中身を先生たちが決めるというものは比較的受け入れられるが、あらかじめ決められた内容のプログラムをそのまま取り入れるのはかなり抵抗があるようだ。いずれにせよ、ライフスキルは日本の教師にとっても大きな変換になる可能性を秘めていると言えよう。

